

燃える花

奄美市立朝日中学校 三年 濱田 鈴

パン、パン、パン。

銃がかわいた音を辺りに響かせた。

「チッ。」

少年は舌打ちをして、素早くがれきに身を隠す。この数分間の間に、何人味方が倒れただろう。何人敵を倒しただろう。汗ばんだ手で銃を握りしめ、少年は息を整えた。

「ふ、震えるな、震えるな。」

カタカタと小刻みに震える手で、銃を握りしめる。

「母さんと、仲間の……、かたきを打つんだ。」

深く息を吸うと、震えが止まった。意を決した少年は、がれきから身をのりだし、銃を構え………。パン。

あれ、と思ったときには地面が目の前にせまってきた。まわりの景色がぼやけていく中、視界のはしに、一人の少女の姿が見えた。この国ではめったに見えない、東洋人の小さな少女だ。色のない殺風景なこの場所にただ一つの赤い色……。燃えるように真っ赤な花を握りしめてあたりを見回していた。

（なん、で……。早く、逃げ、ないと。）

うすれていく意識の中で、少年はそう思った。しかし、周りの兵士たちは攻撃を続けるばかりで少女に気づいていない。いや、まるで見えていないようだった。

（どうして……。だれか。）

少年は、少女を助けようと必死に体を動かしたが、やがて力尽きて動かなくなった。

――誰か……。気づいて――。

少年の死を見届け、少女は赤い花を握る手に力を入れた。あの日もこんな青空だった。少女は寂しそうに異国の空を見上げた。

それはとても暖かい日だった。南の島とはいえ、真冬の空気は冷たい。でも今日はそんな空気を溶かすように太陽が輝き、青い海がキラキラと光っていた。

島で一番大きな港には、灰色の汚れた船が停まっていた。四つになったミヨちゃんは、お母ちゃんと一緒に、兵隊になって旅立つお父ちゃんを見送るためここへ来たのだ。

「オクニのためだよ。」

「オクニのために、立派に戦ってくるよ。」

お父ちゃんと同じ兵隊服を着た男の人たちは、口々にそう言いながら船の中に乗り込んでいく。

オクニって何だろう。ミヨちゃんはぼんやりと考えていた。お父ちゃんもオクニのためにお船に乗って行っちゃうのかな。

「ミヨ。」

突然お父ちゃんに名前を呼ばれ、ミヨちゃんは顔を上げた。お父ちゃんはミヨちゃんと目線を合わせるようにしてしゃがみこみ、ズボンのポケットから何かを取り出した。

「なあに、これ。」

それは畑にあるニンニクみたいなものだった。

「これはグラジオラスの球根。これを育てると真っ赤できれいな花が咲くんだよ。お父ちゃんが外国に行っている間、ミヨが大切に育ててくれるかな。」

「うん、がんばる。」

きれいなお花が咲いたら、お父ちゃんはすぐ帰ってくるような気がして、ミヨちゃんは球根を大事そうに両手で包んだ。

「よかった。」

お父ちゃんは少し笑って、立ち上がると、「それじゃあ行ってくるよ。君も、ミヨも、無事でいてくれ。」

「はい……。お体に気をつけて。」

涙声のお母ちゃんとミヨちゃんを心配そうに見つ

め、お父ちゃんは船の中に消えていった。

ミヨちゃんは、両手の中の球根をきゅっと握りしめた。お花が咲いたらお父ちゃんに見せたいな。早く帰ってきてほしい、遠くにぼつんと浮かぶ船はだんだん小さくなり、日の光を浴びた波が、お父ちゃんの代わりに手をふっているように見えた。

お父ちゃんが旅立ってから、季節はめぐり春が来て、夏に移り変わっていった。太陽の光はいつそう強くなり、青い空にはもこもことした真っ白な雲が気持ちよさそうに浮かんでいる。

「お母ちゃん、咲いたよ。お父ちゃんの花。」

ミヨちゃんは小さな庭の中をぱたぱたと駆け回った。

「あら、本当。」

家の奥からにっこり笑いながら、お母ちゃんが出て来た。お母ちゃんはまぶしいくらいに赤いグラジオラスの花を見て、ほうっとため息をついた。

「きれいなえ、お父ちゃんのお花。」

「うん。早くお父ちゃんに見せたいな。」

二人は時が止まったかのように花に見入った。そうしているうちに、日に日に苦しくなっていく生活も、何てことはなかったような気がしてくる。夏のあつい風が花を撫でた。すると花はゆらゆらと火のように揺れる。

「空襲だあ。」

突然、太く叫ぶ声が聞こえ、ミヨちゃんは、はっとした。見上げると空には無数の黒い鳥のような影がゴォーと不気味な音を立てて飛びまわっていた。

「ミヨ、逃げよう。」

お母ちゃんはミヨちゃんを抱き上げ、近くの防空壕へ向かって走り出した。

「お父ちゃんのお花が・・・。」

泣きわめくミヨちゃんを抱えて、お母ちゃんは細い道を一心不乱に走った。ミヨちゃんの目に映ったのは今までにみたことのない光景だった。

ドォーンと雷のような音が聞こえると同時に、あたりにたくさん炎が現れた。燃える花のようなそれは、家を呑み、人を包み踊り狂っている。必死に逃げる村の人たちは、次々に悲鳴を上げて消えていった。

「お父ちゃん・・・お花・・・。」

燃えさかる炎を見つめ、ミヨちゃんは思わずそう呟いた。

「ミヨ、大丈夫だからね。お母ちゃんがついているからね。」

炎の創った赤い花に包まれながら、お母ちゃんは何度もそう言った。

あれから何十年経っただろう。ミヨちゃんはたった一人で旅をしていた。あの時と同じ、四つのままの姿で。

戦争が終わったミヨちゃんのオクニでは、平和になったと言っているけど、ミヨちゃんはそうは思えなかった。この遠く離れた異国の地では、ミヨちゃんがある日見た光景とかわらないでことが毎日起こっていた。

炎に吞まれる子ども、親を探しまわる子ども、兵士として人に銃を向ける子ども・・・。みんなそのことを当たり前のような顔で受け入れていることが、ミヨちゃんには悲しかった。誰かに止めてほしくて、何度も話しかけたけど、ミヨちゃんに気づいてくれる人は、誰一人いなかった。それでも、ミヨちゃんは諦めていない。

——誰か・・・気づいて——

横たわる少年のかたわらで、ミヨちゃんはしばらくたたずんでいた。そして片手にもったグラジオラスをぎゅっと握りしめ、霧が晴れたように姿を消した。

——誰か・・・、誰か——。

一刻でも早く戦争を止めたくて、ミヨちゃんは、この思いを伝えてくれる誰かを探している。そして、風に乗り、世界を駆けながらミヨちゃんは祈っている。
人が武器を持たない世界になるように。
子どもが笑顔で過ごせる世界になるように。

